

O-6-31

夜勤における疲労度の調査

～仮眠に頸部温電法を導入することでの変化～

相模原赤十字病院 5階病棟

○渡邊 啓子、相内まり子、大戸須美江、高橋 恵湖、岩田 整子、荒尾都威子

1. はじめに近年、夜勤を行う看護職の健康の保持増進のため時間短縮など様々な取組みがなされている。当院でも夜勤に対し「夜勤時間が長い」「疲れる」「眠い」などの声が聞かれる。そのため、仮眠中に質のよい睡眠がとれることで疲労が軽減できるのではないかと考え後頸部温電法に着目し、夜勤による疲労度の調査と、疲労の軽減が図れるのかを検証したため報告する。
2. 研究目的 夜勤に従事する看護職へ仮眠中に後頸部温電法を取り入れる事で、疲労の軽減が図れるのかを検討する。
3. 研究方法(1) 日本産業衛生学会、産業疲労研究会作成の新版「自覚症調べ」を用いて夜勤中の疲労度を調査する。(2) 仮眠時に後頸部温電法を使用し「自覚症調べ」を用いて使用前後で疲労度を比較。
4. 倫理的配慮 対象者へ研究の目的、方法、自由意志の尊重、プライバシーの保護について書面で説明し同意を得た。
5. 結果(1) 夜勤の疲労度調査では身体的疲労が多いことが分かった。(2) 2交代勤務での夜勤における疲労は、仮眠中に後頸部温電法を取り入れたことで軽減できることが分かった。
6. 考察本研究において、夜勤により身体的な疲労が多いこと、後頸部温電法を取り入れ仮眠をとることで、疲労の軽減につながる事が分かった。スタッフからも「使用してよかった」「気持ちよくなった」などの感想も聞かれ、温電法のリラクゼーション効果により精神的にも影響すると考えられた。疲労度は主観的な要素が多く、夜勤前の個人の日常生活や健康状態、仮眠の順番や受け持ち人数、業務量等の条件に左右され、調査には限界があると考えられる。しかし、明らかに今回の調査では、夜勤に従事する看護職が仮眠中に後頸部温電法を用いることは疲労軽減に効果があったと言える。

O-6-33

職員満足度調査の考察と今後の展望

名古屋第二赤十字病院 管理局 経理部 経営企画課

○亀尾 航平、中島健太郎、鈴木 信行

【はじめに】名古屋第二赤十字病院では2012年度より職員満足度調査を実施している。2015年度の実施で5回を数え、これまでの結果から職員満足度向上への課題について考察を行った。
【調査方法】院内イントラネットを通じてe-Learningシステムを利用し、全職員を対象としたアンケート形式の調査を行う。院内ネット環境があれば、調査期間中はどこからでも入力が可能である。アンケートは31項目を8区分(理念、連携、コミュニケーション、モチベーション、主体性、能力開発、医療の質、総合評価)に分類し、各項目を4段階評価で回答を行う。
【結果】回答をもとに、独自に作成したプログラムで集計分析を行った。31の設問には個々の部署では変動があるものの、総計では多少の増減はあるが各回に大きな変化はなかった。これらのデータをもとに各部署責任者へフィードバックを行い、部署毎に検証および見直しを促している。
【考察】病院として職員満足度調査を実施したことへの利点は次の2点である。1点目として、「病院幹部が職員の満足度に関心がある」ということを示せたこと。2点目に、5回の調査により経時的に満足度を測り、比較することができることである。しかし、本来満足度は絶対的な評価による指標であるため、同組織、同項目による調査とはいえない経時的に相対した結果の取扱いについては留意が必要であると考えられる。あくまでフィードバックの材料として、各職場において有効に活用することが重要である。今後の展開としては、日赤のスケールメリットを活かし、同項目の調査を赤十字グループで実施することで、同規模施設とのベンチマークが可能になることを期待する。それにより、各施設のポジションが確認できるとともに、満足度向上のための分析も可能になると考える。

O-6-35

TKAクリニカルパスの検討

京都第二赤十字病院 リハビリテーション課

○野田 拓寛、草木 喜尚、前川 俊彦、櫻木 一成、岩倉 道憲、小林 寛昭、永福 将史、山崎 隆仁

【目的】当院TKAの3週間パスを短縮可能と考え、妥当と考えられるパスを検討する。
【方法】対象は2015年度TKA施行患者73名(内、両側4名)。退院可能となる動作獲得までの日数、及び在院日数の平均を調査した。退院可能となる動作としては歩行・階段・入浴・床動作とした。また在院日数延長の原因となるバリエーション群に注目し、動作獲得までに要した日数及び在院日数の平均を調査した。
【結果】全体平均は退院可能となる動作獲得日数は14.97±5.07日とパスよりも短期で獲得できていたが、在院日数は21.42±5.59日とほぼパスに準じていた。在院日数のバリエーションは32例43.8%がバリエーションであった。しかし、バリエーションにおける動作獲得までの平均日数は18.08±6.20日であり26例81.3%がパスに準じており、遅延を生じたものは6例18.7%であった。そのため、全症例の中で動作獲得日数においてバリエーションを生じた例はわずかに6例8.2%であった。動作は獲得したものの退院までに要した日数はパス群では約5日、バリエーション群では8日あった。バリエーション因子として、動作獲得に遅延を生じたものには合併症や感染があった。また術前ADLが低いことや術後の疼痛が強いことも要因となった。動作獲得に遅延がなかったもののバリエーションとなったものは、介護サービスの導入に時間を要しことや、パス期間中の大型連休や家族による送迎の都合など外的因子であった。
【考察】動作獲得状況からみると14日で退院が可能であると考えられた。バリエーションへの対策として早期離床や患者自身のアクティブな自主トレーニングの指導・実践など患者アドヒアランスも重要なファクターと考えられた。また介護保険の申請が必要な患者に対し早期よりカンファレンスを行うなど関連職種との密な連携を取ることが重要であると考えられた。

O-6-32

選ばれる病院になるための職員意識調査結果と活用について

旭川赤十字病院 事務部 総務課

○藤田 浩二、平岡 康子、脇田 邦彦、青木 晋爾、田端 五月、富安 正典、小松比左志、国貞 玲、児玉真利子、藤田 豪紀

旭川赤十字病院 エクセレントホスピタル推進チーム

【概要】当院の中期計画に掲げられた「選ばれる病院となるための方策、魅力ある病院づくり」の実現のため、院長直轄の「エクセレントホスピタル推進チーム」を立ち上げた。職員のモチベーションが高く働きがいのある職場環境づくりを目指し、職員満足度を高めることを重点においた「オンリーワンプロジェクト」活動を行っている。当院で働く職員の意識を客観的に把握し、今後の改善に役立てるために、2013年より年1回、チームで独自に作成された13項目(選択式)と自由記述の2項目の質問紙調査を実施した。3年間の職員満足度調査結果の傾向と今後の活用について報告する。対象は、正職員、臨時職員を含む1100名である。
【結果】回収率は、各年73.4%、83.8%、74.4%であった。全体の満足度は、各年63.8%、69.7%、69.2%という結果となり、項目別では、「病院に理念があると感じている」の質問に、「当てはまる・やや当てはまる」と回答した職員(以下「肯定的評価」)が各年8割を超え、年々上昇し、「情報の共有化がはかっているか」についても同様の結果となった。「他職種連携が上手く行っているか」、「報告、相談がしやすいか」、「仕事へのやりがいはあるか」については7割以上の結果となった。一方、肯定的評価の低い項目としては、「患者として受診したいか」、「福利厚生に満足しているか」との結果となった。
【考察】今回3年間の調査から、全体として7割の職員は満足度が高いが、課題として、受診に関すること、福利厚生等に関することがあげられた。満足度調査を活用し、今後も「一人ひとりに選ばれる病院」を目指し継続した活動を行っていきたいと考える。

O-6-34

小児病棟における子ども用パス導入の取り組み

秦野赤十字病院 看護部¹⁾、秦野赤十字病院 小児科²⁾

○安部 良子¹⁾、真壁 泰子¹⁾、兵頭 裕美²⁾

【はじめに】A病院小児病棟のクリニカルパスは12種類あり、2015年度の運用率は74%である。保護者のパスはあるが、入院対象の子どもにはパスがなく、子どもは不安・恐怖を抱えた入院生活を送っていた。子どもが安心して過ごせる療養生活を提供し、病気を受け入れ、主体的に病気に向き合えることを目的に子ども用パス導入に取り組んだ。
【活動内容】子ども用パスは発達段階を考慮し幼児期用と学童期用を作成。幼児期用は遊びの体験が興味・関心を惹きだす特徴があるため、スタンプラリー形式とした。学童期用は、言語能力や認識力も高まり、理解すれば治療に参加できるという特徴があるため、入院生活の1日のスケジュールの掲示と看護職からのなぞなどに答える形式とした。また、イラストを入れ視覚的に分かりやすいものとした。運用方法は、入院初日または翌日に看護師から子どもに説明し枕元にパスを掲示した。1日の終わりに、子どもが自分でスタンプを押す、あるいは看護師がなぞなどを出した。その際、子どもがパスを目を向け、日々のアウトカムや今後予定されている処置、検査等を再認識できるようにした。結果、子どもはパスに興味を持ち、幼児期の子どもは毎日スタンプを楽しんでいた。学童期の子どもは入院日数、処置、検査等の理解があった。
【考察】子ども用パスは、自ら治療に参加でき関病意欲の向上に繋がるツールのひとつであると考えられた。また、子どもや家族とより良いコミュニケーションが出来る強い信頼関係が持てたと考えられ、安心して過ごせる療養生活の提供に繋がっていると考える。
【結論】子ども用パス導入は、子どもが安心して過ごせる療養生活を提供し、インフォームド・アセントとしても有効であり、病気を受け入れ主体的に病気に向き合えることに繋がった。

O-6-36

整形外科病棟におけるクリニカルパスを導入しての効果

武蔵野赤十字病院 看護科¹⁾、武蔵野赤十字病院 医療情報管理課²⁾

○宇田 泰祐¹⁾、柴 知子¹⁾、上垣 高次²⁾

【はじめに】当院ではH23年に電子カルテを導入したがクリニカルパス(以下パス)の稼働はできなかった。H26年よりパスの作成が開始され、整形外科病棟では予定手術に対して6疾患16のパスを作成し運用を開始した。運用1年半後、パス導入後の記録への負担と看護の業務変化についてスタッフへアンケート調査を実施したので報告する。
【方法】看護師26名にパス使用前後の業務変化についてアンケートを実施した。アンケートは匿名とし他に使用しない事に同意し参加して頂き、倫理的配慮に基づき個人を特定するデータは利用していない。
【結果】導入前後の業務負担の変化では「負担が減った」が100%、負担が軽減した業務内容は「記録」が95%、「入院カルテ準備」が57%など業務負担の軽減について回答を得た。負担が減り時間が出来た分をスタッフ間でケアについて話し合ったり、意識的に患者に関わる時間を取るようになったとの回答があった。また「パス画面の入力に時間がかかる」「評価基準が判りにくい」などの意見が挙がった。
【考察】アンケートよりパス導入により日々の記録時間が短縮され、入院時のカルテ作成の時間が短縮することで患者へ関わる時間が増えた。また、パスから出力される共通の患者説明用紙を使うことで、入院・手術オリエンテーションに必要事項がもれることなく行える様になった。さらに、院内の委員会や勉強会参加など、以前は日々の業務に追われ勤務時間外に行う仕事も多々あったが、それが行いやすい環境になってきた。
【課題】今後パスに慣れてしまう事で記録が適切に行えないスタッフが増えてくる恐れがある。教育内容の見直しや記録を書く機会を設ける事が求められると考える。